



TITLE:

<特集: 京都と環境のつながり6>自然から学ぶ: 環境と観光 エコツーリズムの取り組み 美山エコツーリズム推進協議会 事務局長 高御堂 厚氏

AUTHOR(S):

CITATION:

<特集: 京都と環境のつながり6>自然から学ぶ: 環境と観光 エコツーリズムの取り組み 美山エコツーリズム推進協議会 事務局長 高御堂 厚氏. 公共空間 2014, 12: 22-25

ISSUE DATE:

2014

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197685>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控え下さい.

【特集6】自然から学ぶ環境と観光

エコツーリズムの取り組み

美山エコツーリズム推進協議会

事務局長 高御堂 厚氏

自然環境や伝統的な文化など地域の魅力を観光客に伝え、その大切さを理解してもらうことで保全に繋げる「エコツーリズム」という取り組みをご存知だろうか。この取り組みを通じて、環境保全や文化の理解だけでなく、地域の活性化を目指す町がある。京都府南丹市の美山町だ。かやぶきの家が立ち並ぶ美山町北地区は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、また、東部に位置する芦生の森には西日本屈指のブナ原生林が残る。このような豊かな自然と文化を利用して、美山町では様々な体験・交流型の観光プログラムを実施している。例えば、子ども達を対象に伝統的家屋への訪問、原生林散策、農作業体験などのプロジェクトを企画し、文化や自然の重みを学ぶ機会を提供している。そこで、今回は南丹市美山エコツーリズム推進協議会事務局長の高御堂氏に環境と観光を結ぶ取り組みについてお話を伺った。

美山町はエコツーリズムの

成功例としてよく取り上げられますが、その成功要因はなんでしょうか。

「農林水産省が農業、水産業の産物を使って体験や

泊をしてもらおうというグリーンツーリズムというものを推進しており、美山のエコツーリズムの基本もそこにあります。美山町内から流れ出ている由良川は近畿でも二番目にきれいな川と言われているし、芦生の研究林（京都大学保有）も残るなど、美山町は非常に豊かな自然に囲まれています。また美山町には元々都市と繋がるうという思いがずっとありました。美山町自然文化村の宿泊施設である河鹿荘は平成元年に都市と農山村の交流拠点として建てられたのですが、それが美山のエコツーリズムのきっかけとなりました。結果的なものだと思いますが、継続的な都市交流を行っていたことが評価されたのだと思います。

平成五年に美山町の『かやぶきの里』が国の伝統的建造物群保存地区に選定されて注目度も上がり、これ以降は観光客も増えて、平成十五年には七〇万人を超えました。それまでは一〇万、二〇万という数字で、鮎釣りに来るとか、

ボタン鍋食べにくるとか、そういう状況でした。」



美山町に残されている茅葺き民家

エコツーリズム推進のきっかけはどういったものでしょうか。

「『かやぶきの里』にポンと来て、風景見て、ちよっとお土産買って帰っていくというバスツアーってあるじゃないですか。ひどいところだったら、美山町をツアーの最終目的地にして夕

方に来て、トイレだけして帰っちゃうみたいなツアーもあります。美山に来る観光客の数が多ければいいという問題でもないでしょうし、地域の人も高齢化が進んでくると、大人数に対応するというのが大変なんですよね。朝早くからお団子つくって、バタバタして、ツアーが終わると観光客はサッと帰ってしまう。更に、「かやぶきの里」の消費単価は七〇〇円くらいなんです。泊まりがあれば二〇〇〇円程度なんです。京都市内の観光なんて一万円近くでしょう。こういった状況に危機感を覚えるようになります。

実際に観光のニーズは変わって来ていると感じています。先に述べた通り、これまで大手の観光会社が発着地と目的地を選んで多くの観光客を連れて来て、短時間滞在して終わりというようなツアーが多くありました。今は地元の人や地元にお金が落ちるような仕組みをつくり、ツアーを行うという取り組みが見られます。大手の観光会社が知らないような観光資源を利用した観光形態を旅行者も求めているし、従来の観光で簡単に地域を回るのには飽き飽きしてきている。迎える側としても美山の持つ良き農村文化を伝えていきたいと思っています。例えば知らない人に対しても挨拶をするといったような、ちょっとしたことが旅をする人にはいいのかな

と思いますね。そういう流れの中で、もっと顔の見える交流ができる旅行を提供すべきなのかなという思いを持つようになりました。今では海外からの旅行者も増えていて、今後は海外の旅行者のためのツアーも力を入れていこうと思っています。

私たちが最終的に目指すものは定住促進なんです。現在は人口約四五〇〇人で、高齢化率は年々上がって現在は42%です。加えて人口はどんどん減っていています。このままいくと二〇年後は地域を維持できなくなってしまいます。成功事例と言われて浮かれています。美山町ではなくて、厳しい局面を迎えています。美山町というのは非常に広い面積を有しており(約340平方キロメートル。うち96%が山林)、これだけ広範囲の面積を持っている町を四五〇〇人という人口と高齢の方々が多いという状況では田んぼも維持できないし、森の管理もできない。そこで、エコツーリズムという観光事業を推進することで定住を促進し、地域をもっと元気にしていこうと考えました。」

エコツーリズムを推進する上で大切にされていることはありますか。

「エコツーリズムには四つの柱があります。一つ目は地域経済に貢献すること。二つ

目は自然環境、伝統文化を守ること。三つ目は地域の住民が元気になること。最後は、環境教育を目的にツアーを組むことです。具体的なツアーの例としてハイキングツアーがあります。環境に触れながら行うハイキングツアーはかれこれ二三年目を迎えました。通常なら立ち入りが制限されている京都大学が保有する芦生の森に入り、原生林の中を歩くことができます。ツアー参加者は、基本は関西圏の方々ですが、東京、九州、沖縄の方もいらつします。『屋久島もいいけど、芦生の森もいい』という評価をいただいています。

ただし、エコツーリズムの弱点というのめいくつかあります。まず、エコツーリズムの場合は地域発信のツアーであるため、大手の旅行会社が企画するツアーに比べて人を集めにくいという問題があります。そこで、特に若い世代を狙ってアウトドアブランドのモンベルと契約を結んで、一緒にツアーを組むという取り組みも行っています。

二つ目は手間がかかるということです。エコツーリズムは体験を重視しているので、それを指導する人たちも必要ですし、プログラムを作る必要もあり、手間がかかるのです。バスツアーは、連れて来て見せて帰れば終わりですが。あとは伝統文化を受け継ぐ『人』が魅力の一つ

であるエコツーリズムでは地域住民の協力が必要なのですが、住民の理解を得るということはなかなか難しいものです。」



お話を伺った高御堂氏と編集員

行政や地域住民の方々とどのような関係を築いてエコツーリズムを推進していますか。

「エコツーリズム推進協議会というものがあるのですが、住民団体や観光事業者、さらに行政からのメンバーが多く入っています。」

困難な点は地域住民の方々の協力を得ることです。それぞれの集落ごとに少しずつ文化は異なるのですが、その集落で格差が生じたりするのがあまり好ましくありません。観光を推進することでみんなが潤うということをアピールしないとなかなか協力を得ることはできないのです。一部の集落のために自分で自分たちが協力

しないといけないのか、ということになります。そのような状況にならないために『オール美山』という言葉掲げ、集落ごとに役割分担をするようにして、それぞれの長所を引き出そうとしています。野菜がとれる集落、日本海側のサバ寿司の文化が残っている集落などがあり、そうした集落の特徴を活かし、一つにして観光に繋げていくことを目指しています。繋げると言っても美山町のような農村文化が残る地域では、理屈ではなく信頼された人がリーダーとならないと動きません。何かを変えたい、という思いがあってもまずは根付いている文化を受け入れる姿勢が大切になってきます。そうして信頼を得て初めて物事を変えることができると思っています。」

高御堂さん自身が美山町のエコツーリズムに関わることになったきっかけはなんですか。

「私は京都で自然系の専門学校の教職員をしていて、公害に関する教育を行っていました。平成に入ってから自然保護、自然教育というのが叫ばれるようになり、公害のように加害者と被害者が明確に分かれているのではなく、我々のライフスタイルが地球環境に被害をもたらしているという視点で議論がなされるようになってきました。自然の中での人間の位置や自

然との関わり方を理解した上でどういうアクションができるのかというのを環境教育を通して身につけるのですが、分かっているにもかかわらず動に移すことって難しいですね。分かっているけど便利さを求めて環境のことは後回しにしてしまうというのが現実です。そういう状況を見て、仕事を辞め、アメリカに渡って二年ほど環境教育の現場を見る機会を得ました。」

そうしている時に、美山で環境教育を行うと聞いてこの地にきました。当時は観光ブームでバスが大勢の旅行者を連れて来るような時代だったので、なかなか自分がやりたい環境教育はできませんでした。しかし、観光客の減少にともなつて、環境教育に重点を置いた取り組みを始めることができました。子ども達だけを対象にして、美山の自然と触れ合うプログラムを作りました。私自身、大量の観光客が来て、誰が来たかも分からないうちに帰っていくようなツアーよりも、少ない人数でも自然や人との触れ合いを通じたプログラムの方が大切なのかなと思います。実際にこうした取り組みをしていて、参加人数が確実に増えているという変化があります。環境教育が求められていることの現れなのではないでしょうか。」

最後に、公共政策大学院の学生に一言お願い致します。

「やはり住民目線で汗をかくてくれる行政マ
ンがいてくれたらすぐく頼りになると思います。
行政としての知識、アイデアを持つている方と
地域が協力関係を築くことができれば地域がも
つと元気になるのではないのでしょうか。『お役所
仕事』という悪い言葉があるように、どうして
も行政はその組織が大きくなると融通が効かな
いということがあります。規則ももちろん大切



美山町の美しい田園風景

ですが、それだけに縛られていては本来に地域
が求めていることは何なのか把握することはで
きないでしょう。地域目線で物事を考え、チャ
レンジを後押ししてくれる行政マンを私たちは
求めています。」

【所感】

今回の取材では、環境と観光を結びつけるこ
とで地域の活性化を達成しようとする取り組み
について学ぶことができた。豊かな自然、魅力
的な伝統文化を持つ美山町だからこそできる取
り組みであるが、同時に地域の理解の得ること
の難しさについてもお話を聞くことができ、非
常に興味深かった。「エコツーリズム」は、地域
住民の理解なくして推進することはできない。
高御堂氏は、まずは根付いている文化を受け入
れることが大切だとおっしゃっていた。このこ
とは、今後社会に出て行く我々学生にとっても
示唆に富む言葉だと思う。何かを変えたい、変
えなければならぬと感じても、まずは相手を
受け入れることから始めなければ、信頼を得る
ことはできないのではないだろうか。環境とい
うテーマのもと進めた取材であったが、このよ
うなことで考えることができた有意義なイン
タビューであった。

実際に取材で訪れて、美山町の自然の豊かさ、

伝統文化の魅力は筆舌に尽くし難いものであつ
た。顔の見える観光を通して、自然の中の人間
の立ち位置を再確認できる場だと感じた。住民
の理解を得ることの難しさ、広報の難しさに直
面しながらも着実に「エコツーリズム」を推進
していく美山町の今後の発展を願っている。

(文責 中島和博)

南丹市美山エコツーリズム推進協議会

平成 22 年 4 月に発足し、美山町でのエコツーリズム推
進に向けて地域全体で取り組んでいる。

都市と農村の交流拠点施設として開設された美山自然
文化村は、眼下に清流由良川を臨み、かやぶき民家、キ
ャンプ場、りんご園などの施設を備えている。また、芦
生の森ネイチャーガイドハイキングツアー、野草・薬草教
室、田舎の生活体験、伝統食体験などの体験プログラム
や修学旅行の受入を積極的に行い、地域の観光・交流の拠
点として地域との連携をとりながら運営している。